

○九年には摩尼教の經典クアスツニアフト、一九一〇年には佛典チシャストウスチク、翌年には法華經普門品を譯出し、其後金光明經を得て専念その譯解に従ひ、本文の一部は既に刊行せられて居る。

以上述べた外に最も注意せねばならぬのは、氏が生涯の事業としたトルコ語方言集で、一八八八年に第一巻の印刷を初め（一八九三年に出版されたが）、一九一一年に最後の第四巻を出すに至つた、古今各部族の方言を集録した雄然たる此の四冊の大著述は、氏自からも補訂の要ありとして居たもので、尙ほ完全とは言ひ得ないにしても、學者にとつて非常に貴重で、要用缺く可らざるものなること勿論である。

此の如くにして氏の天成の才能と絶倫の精力とは、トルコ文化に關する古今東西の資料を檢討して、それゝ發達の歴程を闡明し、遂にトルコ學なるものは茲に一新生面を開くことになつた、科學的に此の學問を建設した鼻祖として、氏の名と業績とは永劫學界に滅びない、露西亞の學者はトルコ學の上にラードロフ時代なる名稱を附して居るが、此の名は獨り露西亞のみに止まらず世界的に行はれることになるであらう。

はじめてラードロフ博士の名を聞いたのは今より十數年以前大學の講筵に侍したことである。その後學究の境涯に入つてから、日として氏の著述に誘導啓發せられぬは無かつたといふても甚しい誇張には陥るまい、かゝる月日の間に自から生じた敬慕の念は、いつとはなくこの未見の老大學者の風貌を想像によつて作り上げて、朧げながら腦裏に印象する迄になつた。奇しき因縁、眞に奇しき因縁である、大正三年八月七日の午後には、自分はフインランドの南、ライボラの寒村に運ばれて、博士の夏居^{ダーチャ}に博士の柔かい手を握り、面り先生と呼ぶことになつた、